国立国語研究所学術情報リポジトリ

文献レビュー8 Heath, S. B. (1984) “Protean shapes in literacy events:Ever-shifting oral and literate traditions”

メタデータ	言語:
	出版者: 国立国語研究所
	公開日: 2023-11-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 富岡, 花
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000105

Heath, S. B. (1984)

“Protean shapes in literacy events: Ever-shifting oral and literate traditions”

In Tannen. D. (ed.) *Spoken and written language: exploring oral and literacy*, Norwood, N.J.: ABLEX Pub. Corps.

富岡　花
監修：角　知行
2023 年 10 月 31 日

1. 序文　【問題提起】

本論文のはじめに、Heath は、これまでの先行研究をまとめ、そこで残る疑問を示し、本論文で扱う問題を提起している。

Heath は、1960 年代の先行研究について、口頭によるコミュニケーションを中心とした口承文化（oral tradition）と文字によるコミュニケーションを中心とした文字文化（literate tradition）を二分する見方をしてきたことを説明する。そのなかでも、Goody & Watt(1963)、Ong(1967)、Goody(1968)と Havelock(1963)などは、口承社会と文字社会を二分する見方を提唱し、社会と個人の両方にリテラシーが一定の認識的、社会的、言語的影響を持つと主張してきた研究としてあげている。その他、口承文化と文字文化の社会集団を対照的に見た研究や、社会の中で識字率が上がるにつれ、口承文化の習慣が減っていくことを示した研究がある。

既存の先行研究は、社会が口承文化（oral tradition）から文字文化（literate tradition）への発展の連続体にあり、限られたリテラシーの社会と高いリテラシーをもつ社会があるという構図を示してきた。しかし、リテラシーの過程とその（個人的あるいは社会的）成果が一貫して、普遍的であるというこのような構図に疑問の余地があると Heath は指摘する。（p.92）

Goody らは、工業化以前の伝統的社会では、社会的および文化的要因がリテラシーとその使用に幅広い影響を与える可能性があることを指摘した。しかし、その点に注目した 70 年代の研究者は少なく、現代の複雑な産業化社会では、リテラシーの社会的および文化的相関関係にはほとんど注目されていない。また、成人になってから職場での経験がどのよ

うに学校教育で習得したよみかき能力の維持と保持に影響するかも注目されていない。そして、多読することや批判的に読むことが話す力の向上にも影響を与えることがよく強調されるにも関わらず、口頭言語と文字言語の形式と機能を比較しているデータはほとんどないことを指摘する。Heath は、こうした議論に最も適したデータの典拠となるのは Goody が提唱した「文字によるコミュニケーションの具体的な文脈（context）」だと考える。

よって、本論文では、以下の疑問に対する答えを探った。

「現代の高度産業化社会でさまざまな社会集団にいる個人はいつ、どこで、どのように、だれに向けて、そしてどのような結果でよみかき能力を使っているのだろうか。学校で学んだよみかき能力は、その後の日常生活でどのように伸びるだろうか。伝統的社会がそうであったように、リテラシーを制限する状況が現代社会にもあるだろうか。あるとすれば、それはどのような要因か。また、よみかき能力に制約のある集団は、社会・経済的階層の向上や、論理的推論の発達、政治的判断をするための情報の入手（アクセス）など、高い識字能力を持つことによって得られる利益を受けられないのだろうか。」（p.93）

2. The Literacy Event（「よみかきイベント」）　【必要性】

序文でも説明されていたように Heath は、これまでのリテラシーに関する研究で考えられてきた口承文化と文字文化を二分する見方、また、リテラシーの過程とその成果に対する考えに疑問を投げかけた。そして、伝統的な社会を対象とした過去の研究で明らかにされてきたことが現代の複雑な社会でも同様に言えるのかという問題に加えて、よみかき能力の保持に影響を与える場面にこれまで注目されてこなかった点、文字言語と口頭言語の使用の形式と機能を比較したデータが少ないことを指摘した。そして、それらを明らかにするために Goody が提唱した「文字によるコミュニケーションの具体的な文脈（context）」を提案している。本節では、本研究の鍵概念となる「よみかきイベント」についての説明とともに、序文で示した問題に取り組む必要性をさらに説明している。

Heath は、「現代社会のある特定のコミュニティの中での口承文化と文字文化の実際の形態と機能、また、口頭言語と文字言語との共存関係を検証するのに役立つ鍵概念が「よみかきイベント（literacy event）」である」（p.93）と説明する。「よみかきイベント（literacy event）」とは、「なんらかのよみかきが、コミュニケーションに参加している人の相互行為の性質や解釈過程にふくまれている」[1]（p.93）あらゆる場面のことである。

発話イベント（speech event）（Hymes, 1993）と同様に、よみかきイベントにもその発生の規則があり、状況によってよみかきイベントの構造と用途の特徴は様々であると Heath は説明する。発話イベントで文字資料に情報をつけ加えて説明したり、強調したり、矛盾を示したりすることがあり、その場のコミュニケーションの参加者は場面や状況に応

じて口頭と文字によるコミュニケーションのどちらを優先させるかといった解釈能力も求められる。例えば、申請書を記入する際、記入者は口頭での説明を聞くべきか、申込書を記入し終えるべきかをその場で判断する。Heath は、多くの場面では文字資料が形式的なものに過ぎず、それらを読むことが期待されていないこともあると述べている。文字資料が必ずあるが、発話イベントが優先される例として、ガールスカウトのクッキーの訪問販売などを挙げている。ガールスカウトは、自分の所属団や売り上げの用途などについての資料を渡し、口頭で同様の内容を説明する。この時、ガールスカウトの話を聞かずに、資料を読む人は少ないだろう。

つまり、様々な文脈の中でよみかきイベントが行われる状況の枠組みを知ることが重要であると Heath は主張する。よみかきイベントの状況は、それぞれによって大きく異なり、学校や職業訓練プログラムで教育されてきたようなリテラシーの従来の期待を否定するかもしれないからである。筆者は、「今日のコミュニティ内でのリテラシーの文脈とその使用を調べることで、実際に長文を読み書きする場面よりも、発話の形式と使用に関する適格な知識を必要とするよみかきイベントの方が多いことを示せる」（p.94）のではないかと考える。そして、文字コミュニケーションの文脈を明らかにすることによって、「ある特定のコミュニティを『限られたリテラシーにしか達しなかった』または、『熟達したリテラシーに達した』というような特徴づけや、言語の形式と機能が口承文化よりも文字文化と関連している（あるいはその反対）という考えを問い直すことができる」（p.94）と述べ、本研究の重要性を示した。

３．The Community Context（コミュニティ内の文脈）　【調査内容】

＜調査概要＞

Heath は、1969～79 年にアメリカ南部カロライナのトラックトンというコミュニティで行った調査データをもとに考察を行った。トラックトンは、労働者階級の黒人コミュニティである。トラックトンの成人の多くが地元の繊維工場で働いており、彼らの収入は、州内の公立学校の教員の収入より多い。トラックトンの成人は読み書きができ、子どもの教育の必要性についても積極的に話していた。データは、コミュニティ内の主要なネットワーク、宗教施設や職場でエスノグラフィーを用いて、コミュニティの個々のメンバーにとって書きことばと話しことばがどのような形式と機能を持っていたかを記録して収集された。

3.1．At Home in Trackton（家庭生活でのよみかきイベント）

近所内での日常生活では、様々な場面で書かれたもの（文字資料）がコミュニケーションに関わる機会が多くあった。しかし、大人も子どもも自ら書く機会は少なかった。筆者は親子間のよみかきイベントと成人の間で見られるよみかきイベントを分析している。

＜親子間のよみかき＞

トラックトンでは、大人が子どもに読み聞かせをすることはなく、また、トラックトン内では子ども向けの書籍も少なかった。しかし、大人たちは子どもたちの年齢に関係なく、子どもたちから書かれたものについて質問されれば、それに必ず返答していた。例えば、住所や道路標識、商品のブランド名や T シャツのロゴなどを子どもに聞かれれば、それを読み上げていた。大人は意識して子どもたちに読み書きするところをやって見せたり、教えたりはしなかったが、子どもたちは読むという行為が基礎的な知識を学ぶためにすることであるという強い感覚を持って、学校に通っていたと Heath は観察している。

例えば、就学前の児童は、それぞれの環境の中で様々な種類の文字情報を読むことができた。彼らは、商品パッケージに書かれている商品のブランド名と説明を区別することができたし、様々な文字情報がある商品でも値札を区別することができた。このように、子どもたちは、日常生活のなかで必要だと判断した文字情報を読み取り、そのコミュニティの規範に適した形でよみかきイベントに参加するようになっていく。彼らは、自分たちのコミュニティ内での文字情報を介した社会活動をよく観察していたと筆者は分析する。

主流の学校教育を重視する親を対象とした文献でよく見られる読み書きの日常的習慣は、トラックトンで見ることはない。寝る前の読み聞かせや子ども向けの本、読書のための時間もなく、読書に関連した質問を大人が子どもにする習慣はトラックトンでは見られなかった。例えば、親が子どもに「それは何？」「本はこうやって持って。よく聞いて、何が書かれているかみよう」などという語りかけはしない。また、親は子どもに合わせて、身の回りのことについての語りを単純化することもない。その代わりに、彼らは身近にあるものや出来事について話し、すでに知っていることと比較する。子どもたちはプリントの絵や文字から物の名前やその特徴を学ぶのではなく、すでに見覚えがあり、似ているものと関連付けていくことによって、自分の会話を広げていく。以上のように、トラックトンの子どもたちの幼少期の自発的な語りは書かれたものによって形成されたものではなかった。大人からの語りかけを模倣し、聞いてくれる人たちに褒められたり、特定の語りの形式によって様々な反応を受けたりすることによって話す力を身につけ、成長させていくのであると、Heath は親子間で見られたよみかきイベントを考察する。

＜大人同士の会話と文字によるコミュニケーション＞

トラックトンの成人も、成人の読書習慣とその動機に関する既存の文献(cf.Staiger,1979; Hall & Carlton, 1977)に見られる成人とは、異なる方法と目的のために文字資料を使用していた。トラックトンの大人たちの間では、読む行為は 1 人の個人を中心としたものではなく、社会的活動であった。例えば、就学間近の子どもの医療記録を入手するための説明書が 1 人の親のもとに届き、それを持って玄関に出ると近所の人たちが集まり、会話が始まる。「これどういう意味？」などといった説明書に関する質問は、聞いているあらゆる人に向けられ、周囲の人たちが同じような課題に直面したときの経験についての語りが展開する。口頭でのやりとりが続くなか、説明書の文章そのものに注目されないときもあった。

大人たちは、様々な目的のために読み書きをし、そのほとんどは社会的な活動であったと筆者は分析する。筆者は、彼らの読み書きの目的と場面を次のようにまとめている。（p.99）

1. 道具的なもの（Instrumental）：日常生活のなかで直面する実用的な問題についての情報を提供するため。（例）請求書、領収書、値札、道路標識、住所
2. 相互作用的（Interactional）：第一次集団以外の人たちとの社会的関係に関係する情報を与えるため。（例）アニメ、バンパーに貼るステッカー、手紙、新聞特集、グリーティング・カード
3. ニュース関連（News-related）：事務的連絡や予定されているイベントについての情報を提供するため。（例）新聞記事、政治的なチラシ（選挙ポスターなど）、市役所からの指令
4. 確認（Confirmation）：すでにある考えや意見への裏付けを示すため。（例）聖書への言及、商品の宣伝パンフレットなど
5. 記録の提供（Provision of permanent records）：公的機関から求められる情報を記録するため。（例）出生証明書、証書貸付、確定申告
6. 記憶の維持（Memory-supportive）：記憶の補助として役立つため。（例）連絡帳、電話番号、手帳のメモ
7. 口頭メッセージの代用として（Substitutes for oral messages）：対面や電話での連絡が難しいときや恥ずかしいと思うときに口頭でのコミュニケーションの代用のため。（例）遠くの町に住んでいる人へ送るお礼のメッセージ、学校や職場への遅刻・欠席の連絡、親の代わりにおつかいで生活品を買いに来た子どもの信用供与を地域の商人に依頼する書面

以上のすべての読み書きの場面で、各個人はリテラシーを社会的な活動の機会としてとらえていたと筆者は分析する。例えば、夕刊はそれぞれの玄関先で読まれ、ニュースについての会話は隣の家の玄関先にいる人へ、そしてまたその隣へと近所内で広まった。1 人

で読書をする場面は、年配者が聖書などを 1 人で読むとき、または学校に通う子どもが本や宿題を 1 人で読むときに限られていた。つまり、「トラックトンでは文字情報は決して単独では成立していない。それは会話のなかに再創造され再言語化されている」[2]（p.99-100）。そのようにして、大人も子どもも文字テキストの断片を会話のなかに取り入れた。

トラックトンの住民の読み書きの習慣は、通常、識字率が高い集団に見られる習慣とは異なると筆者は主張する。トラックトンの住民は、子どもたちに本の読み聞かせをして、本についての会話を促したりしないし、長い散文体の文章を読んだり書いたりしない。しかし、トラックトンの家庭では、口承文化によく見られる習慣にも適合していない。子どもたちは幅広い言語スキルを早くに身につけ、子どもたちの言語もその両親の言語も定型的な表現が圧倒的に多いというわけでもなかったと筆者は指摘する。

3.2. At Church（教会でのよみかきイベント）

トラックトンの住民は、コミュニティ外でも読み書き能力が必要とされる場面が多くあり、そのうちの一つが教会生活である。住民のほとんどは、通常、月 2 回行われる日曜礼拝のために田舎の教会へ行く。教会には、トラックトンの住民だけでなく、学校教師、家庭内労働者、病院職員、地元小売店の店員、それから農家の人たちが集った。集まる人たちの教育水準は様々だった。小中学校で数年だけ学んだ者から大学院まで教育を受けた専門職の者までいた。教会内には、教会メンバーに関する報告、行事や葬儀などの案内、お知らせなど、様々な文字情報が至る所にあった。教会に集う様々なレベルの読み書き能力を持つ者にとって、教会という場は、それらの情報を形式的にだけでなく、内容も理解して読めることを示す場でもあったと筆者は考察している。

しかし、教会の礼拝では、文字形式から離れることが多い。例えば、礼拝で最初に歌う讃美歌は、書かれた言葉から歌い始め、書かれている言葉が基となるが、聖歌隊の指揮によって新しい言葉が加えられるなどして変更する。祈りの言葉も同様に、1 週間前に任された人があらかじめ書いて用意しておく。筆者は、ある日の礼拝で学校教員をしている女性が実際に口頭で話した祈りの言葉と事前に用意して書いてきた言葉を比較した。その結果、書いてきたものと実際に口頭で話した言葉には様々な違いが見られた。主な違いを 4 つにまとめている。一つは、「主よ」「イエス様」など定型的な呼びかけが事前に書いてきたものと比べて、繰り返しあり、多かったことである。二つ目は人称代名詞の変化である。準備した言葉には一人称複数形の”we”や古い人称代名詞の“thee”“thy”“thou”が使われていたが、口頭では単数形の“I”“my”“me”や古い人称代名詞よりも一般的な“you”が途中から使われていた。三つ目に書いてきた文章が全体的に単文を使って、繰り返し同じような文体を使っていたのに対し、口頭では重文や複文と単文の繰り返しを変化させながら使っていた。最後に書いてきた文章が標準的な英語であったのに対し、口頭では祈りが進むに

つれ、砕けた話し方と黒人英語の話し方の特徴が見られた。このように一度思考を言語化して、文字にしたものは、その場の聴衆に祈りの内容が届くように、その場でその都度、文書にしたものから少し離れて口頭で再創造されていたと筆者は分析する。

トラックトンの住民たちの教会生活の実践は、口頭言語と文字言語の使用のいずれもここでは支配していない証拠を示していると筆者は説明する。人々は口頭と文字の両方にアクセスし、使用していた。書かれたものを基にして行われた口頭での発話は、より長く複雑な文が産出され、フォーマルな文体からインフォーマルな文体へとスタイルの変化も見られた。口承文化の特徴の一つであるとされる、話者が話の内容に個人的な関与を示す表現を使って、聴衆と経験を共有し、聴衆と一体となろうとする姿勢は、讃美歌、祈り、説法などを口頭で行う場面でも見られる。しかし、その他の口承文化の特徴、例えば、単純な複合語を使ってつなげた単文や冗長を含む定型的な文章などは見られない。つまり、このような場面で使われる言語の形式や使用は、口承と文字文化の両方の特徴を持っており、どちらか一方だけではないと Heath は主張する。

3.3. At Work（職場等でのよみかきイベント）

トラックトンのほとんどの成人は、繊維工場で働いていた。就職するには、工場の人事部の事務所へ直接行った。そこでは、人事部の職員が口頭で応募者に質問をし、職員が応募書類を記入した。応募者が書類を自分で記入することはなかったし、応募の申し込みをする際に文字情報を渡されることもなかった。採用されると、まずは見習いの形で、仕事場を見学し、就業時間の最後の数時間で経験者に機械を使って仕事のやり方を教えてもらった。工場内の各セクションでは、文字資料はあまりなかった。巡回する工場長や品質管理担当者などが作業員に質問して、機械の状態を確認し、必要な情報を記録した。

応募の段階でも就職後の職場でも、作業員らは、口頭でのみやりとりし、書類を自ら記入することはなかった。その理由は、作業員たちが読み書きできないからではなく、工場側が情報の記録を標準化させたいからだった。応募者に応募書類を記述させない理由は、その方が効率的でやりやすいからだった。応募者に自分で書類を記入してもらうと、鉛筆で記入する人もいれば、手書きの文字が読みづらい人もおり、必要な情報を十分記入していなかったり、必要以上に情報を多く書いたりする人もいた。職業訓練もかつては、マニュアルや説明書を使って講師による座学で行われていたが、その方法を生産性がなく、非効率的だと役員らは考えた。

トラックトンの大人たちは、工場以外の銀行、信用金庫、金融機関などでも同じようなよみかきイベントを経験していた。文字資料にほとんど、または、全くアクセスがないなかで行われる口頭でのやりとりは、取引に大きく影響した。例えば、信用金庫で信用貸しの申請をする際などだ。筆者は、実際に信用組合での面談時の対話を文字に起こして、示

している。そこでは、信用組合の職員が手持ちの資料をもとに申請者に質問を続ける。しかし、申請者は、職員が持っている資料を見せてもらえず、やりとりは口頭で続く。文字資料にアクセスすることができ、それをもとに面談を勧める職員の説明は、時に不十分であったり、分かりづらかったり、誤解が生じることもあった。このよみかきイベントでは、申請の結果を文字資料が左右するにも関わらず、申請者がその資料を見ることも、資料内容について確認するための質問をすることもできなかった。こうした状況の場面は、トラックトンではよくあることだった。住民たちは、地域センターのプログラムでは高度な読解力などの育成ではなく、面談やその他場面（歯医者や病院での診察場面など）で自分たちが知るべき情報を相手が持っているときに、その内容について質問することができ、その場を乗り切る力の育成を目指すべきだと主張していた。

４．Conclusion（まとめと結論）【結果・便益】

本節では、調査結果のまとめと過去の研究を参照にしながら考察を行い、明らかになったことから先行研究で示されてきた考えを問い直している。

＜「口承文化か文字文化」、「識字社会か非識字社会」への問い直し＞

トラックトンの住民は日常生活で必要な文字情報を読むことができ、コミュニティ内でのコミュニケーションの一つとして書くこともできる。その意味でトラックトンは、識字社会であると Heath は述べる。しかし、トラックトンの様々な場でのよみかきイベントでは、文字資料を理解するために異なる発話形式の使用を必要としていたことを加えて指摘する。トラックトンの住民は、多くの場合、文字資料によって得た情報を口頭でのみ表現し、文字資料を理解する際に期待される適切な発話イベント（speech event）で応答しなければならない。こうしたことからも、トラックトンを既存の口承文化または文字文化のどちらか一方であると特徴づけることはできないと Heath は主張し、そのどちらでもなく、その両方の特徴を持つのではないかと考える。

そして、「トラックトンのよみかきイベントの事例とその使用パターンは、コミュニティを完全な識字社会から制限された識字社会（あるいは非識字社会）という１つの連続体のどこかに位置付けることはできないことを示した。それよりも、口承と文字という２つの連続体を考える方が適切だろう」（p.111）と筆者は提言する。

その２つの連続体の重なり具合や構造・機能の類似点は、コミュニティの文化的特徴によって異なると加えて説明する。例えば、コミュニティ内での空間の使い方や大人と就学前の子どもの関わりは、一見関係ないように見えるが、実は識字習慣を身につけるために重要であることを示していた。トラックトンでは、玄関先での近隣との付き合いや、老若男女ともに家の中にいるよりも外にいることを好む傾向があるなど、各家庭内のコミュニ

ケーション・ネットワークにコミュニティ全体が組み込まれ、1 人で何かを読むことにあまり価値が置かれていなかったことで文字言語を協力して解読する力を強化したと考えられる。Heath は、このようにリテラシーとその使用にコミュニティの文化的特徴が関係することを説明した。

＜トラックトンでの読解の過程＞

筆者は、以上のように、トラックトン住民の各個人が文字情報を理解する過程は、一般的な読み書き能力を持つ個人と同様の過程で文字情報を「集団で」理解していると、説明する。読解の 3 つの段階は、次のようによく考えられている。①テキスト自体に注目して文字を解読する。②テキスト内容と関係する知識や経験を持ち込む。③テキストを超えて解釈する、またテキストと読者の経験を合わせて新しい情報を創造する。トラックトン住民もこれと同じように「集団で」文書から情報を得ていたと筆者は考察する。しかし、トラックトン住民のリテラシーの大きな違いは、①特定の解読スキル（文字か音か）にどの程度焦点を当てているか、②集団の中で各個人が意味理解の過程で与えられる実践量、③そしてそれぞれに割り当てられるグループへの解釈責任である（p.112-113）と Heath は考える。

＜リテラシーの社会的影響＞

Heath は、現代の複雑化した社会でリテラシーがもたらす社会的影響についても、工業化以前とそれ以降の社会でのリテラシーに注目した研究を参照しながら、考察している。

トラックトンでは、高校で高度な読み書き能力を身につけても、より高収入の仕事にはつながらなかったし、投票するときの政治的判断に必要な情報をテレビ番組やラジオよりも多く得られるとも限らなかった。こうしたトラックトンでのリテラシーは、歴史社会学研究が工業化以前の社会でのリテラシーの影響を示した点と類似すると、筆者は考える。それは、Cressy（1980）ら歴史社会学者が主張したように、それぞれの社会におけるリテラシーの文脈と用途がその価値、形態や機能を決定づけるということである。また、社会によっては、リテラシーがよく言われるような有益な効果をもたらさないという点である。

Heath はさらに、工業化以降の社会でのリテラシーの社会的影響に関する先行研究から、工業化によりそれまで必要だと考えられてきた読み書き能力の種類が変容したことにも言及している。例えば、Sanderson(1972)は、イギリスの産業革命による機械化と経済発展が教育システムに求められる読み書き能力を低くし、必要とされる読み書き能力の種類の変化にもつながったことを示した。実際、イギリスの産業革命で機械化が進んだことで、経営者はそれまでの労働者よりも識字能力が低い人たちを採用することを可能としたとされている。さらに、19 世紀後半のアメリカでは、社会が共通テストなどの標準化された評

価基準に価値を置くようになり、リテラシーが社会的価値観にもたらした影響についても筆者は触れている。

以上のような歴史社会学研究を踏まえて、Heath はより複雑化した現代社会のリテラシーの変化と影響をまとめている。まず、現代社会の多くのコミュニティは、非識字社会（印刷物など文字資料にアクセスがない状態）でもなければ、完全な識字社会でもなく、その間にあると主張する。さらに、アメリカ合衆国のように大きい複雑な社会では、国の技術開発状況と市民の日常生活に政府機関が介入することで、個人が必要とする読み書き能力は大きく変化していることを指摘する。例えば、日常生活で必要な申請書、報告書や会計処理の書類を理解し、それに対応することは、学校教育によって育成される長文読解や作文能力とほぼ関連していない。また、テレビなどのメディアの発達により、ニュースや天気予報などを知るために文字情報を読む必要性もなくなり、職場でも文字資料ではなく、音声や映像による説明でその場による研修がされている。

筆者はこれまで大きな社会的文脈の中でのリテラシーの変化はよく話題となり、研究されてきたが、トラックトンのようなコミュニティでリテラシーがもたらす具体的な影響はあまり調査されてこなかったことを指摘し、本研究の意義を示す。そして、「脱工業化時代において、それぞれのコミュニティの成員は、各自の生活のなかでリテラシーの形態と使用に異なる様々なパターンの影響力と統制力を持っていることは明らかである」（p.115）と述べる。続けて、「口頭によるコミュニケーションと文字によるコミュニケーションの性質とそれらの相互作用は、常に変化する。そして、こうした変化がリテラシーの個人的・社会的意味の変化に対応し、さらに変化させている」（p.115）と、これまでの考察を通して主張する。

最後に Heath は、本研究によって明らかにされたことがこれまでの先行研究で考えられてきたことを問い直すきっかけとなることを期待し、さらに本研究の意義を示している。「よみかきイベントを通して、口頭言語と文字言語の使用を長期的に観察することで得られる情報は、文字文化と口承文化、口頭言語と文字言語の変幻自在な形を受け入れることを可能にするかもしれない。そして、社会的現実を持たない仮設の連続体（完全な識字社会かそうでないかの連続体）のどこかにコミュニティを位置づけようとする現在の傾向から離れることにつながるかもしれない。」（p.115-116）

注

1） 和訳は角（2012, p.175）によるもの。

2） 和訳は角（2012, p.175）によるもの。

参考文献

角知行（2012）『識字神話をよみとく―「識字率 99%」の国・日本というイデオロギー―』明石書店

本文献レビューは、国立国語研究共同研究プロジェクト「定住者外国人よみかき研究」の研究成果である。また、本文献レビューの内容に対する責任は本プロジェクトが負う。